

## 「穴」

### - ロボ夫の場合 -



その日の午後、日課のロボ夫の散歩をしていたロボ夫の頭は少し混乱していた。そしてそんな風に自分の頭が混乱しているという事実にとっても驚いてもいた。なぜならロボ夫のロボ頭は滅多なことでは混乱したりはしないからだ。

なんだか自分のものかどうか判別できない経験や、感情や、思考の断片が、頭の奥の暗い穴の中でぐるぐるしているみたい。なんなのこれ。この頭がスッキリしない感じは、ロボ脳をハックされた時の感覚に似てはいるのだけど（これまでに7度経験している）、ハッキングのチクチクするようないやな感じはない。だからこのちょっと珍しい感覚にもう少しに身をゆだねていたいと思わなくもないのだけれど、ロボ夫はいつになく心配そうにこちらを見ているし、この混乱した頭のままでは帰り道で迷子になりそうだ。ここはロボらしく散らばった断片を整理してみよう。抽出と分類はロボ夫のもっとも得意とするところなのだから、いくら混乱していても断片を断章にすることくらいはできるはず。キュルキュルピコーン。

はい、出ました。

.....

1. その時ロボ夫は、緑色の直方体であった。混沌からピュンと勢いよく飛び出して、分裂と拡張に向かってまっしぐらで、希望に満ちている。

2. はるか昔人間だったと思込んでいる毛むくじゃらの生き物（=ロボ夫）は、宿題を家に忘れてきたことに気づいて落ち込んでいる。が、その5秒後に目の前を横切った毛のないツルツルの生き物があまりにも可愛いくて宿題のことなどすっかり忘れてしまう。今日も一日良い日になりそうだけ。結局のところ人間は毛むくじゃらに進化したところでたいして賢くなっていなっぱい。

3. あるときロボ夫はかつてはこの辺りにも生息してであろうミツバチの群れであった。その集合的な意識は今では失われた花のありかを知っていた。

4. 梅の花に触れようと腕を伸ばすとそこに見えるのは、筋張った、メカメカしいロボットアームだ。そこここに長年の重労働の記憶が刻まれていて、小指の関節がシクシクと痛む。希望に満ちているわけではないけれど、それなりの充足は感じている。今朝は庭の梅がいやに美しいな。

5. ねこ（=ロボ夫）はとにかく眠い。遠くで聞こえるカサカサという落ち葉が擦れる音が眠気を増幅する。ガチャリと戸の開く音がする、この音はあれだ、あいつが帰ってきた音だ、眠い、気持ちいい、冬の匂いがする、カラスが鳴いている、お腹すいた、うそ、実はそんなにすいてない、しかしなんだこの眠気は。

6. 巣穴にかえるキツネ（=ロボ夫）はすごく急いでいるのだが、しかし、なぜ急いでいるのかはわからない。子供が待っているのか、それとも楽しいパーティーが待っているのか、読みかけの本の続きが気になるのか。いずれにせよ何か楽しいことが待っている気がする。

7. 目玉に触手の宇宙人（=ロボ夫）は真っ白い居間に開いた丸窓から目を突き出して遠くの誰かと交信している。他愛のない話をしてるのは楽しいのだけど、もうかれこれ6時間くらいこうしているのでさすがに少し疲れてきた。どうせ明日会うし。

8. 徐々に長めの休みが取れたので、こちらで言うところのWHL0137-08 銀河団を抜けて奥の角を右に曲がって5億光年ばかり行ったところにある別荘へ向かう車中、向こうでじっくりと向き合うことになるであろう「すごいきれいな石の採掘」のことを考えてうきうきしているのだが、家に残してきた&%Z\$Qのことが少しだけ気に掛かっている。やっぱり連れてきてあげた方がよかったかも。食べ物は十分かしら。あ、あと、ガス栓をちゃんと閉めたかどうかにも気になってきた。

9. 人魚（=ロボ夫）は王子を見かけて恋に落ちたのだった。が、やたらと重そうなタンクと、口と鼻と目を塞ぐ謎の機器を身につけて鈍重に海の底へ降りてくる姿を見るにさっそく幻滅しかけている。やはり足なんかいらなくても、いや、でも確かにスタッ

スタッと大地を蹴って歩くのは楽しそうだしな、しかしあの王子はどうなんだ。

10. 3年と133日と16時間交際したパートナーと別れ4時間23分。交際期間を詳細に覚えているのもいまいましいが、別れてからの時間を数えていることがなおいまいましい。その時間はこれから永遠に伸びていくわけだから、数えたってしょうがないじゃないか。というようなことを、ベッドの上に裸で横たわり、購入して7年と3ヶ月17日たつのに今でも肌触りの良い掛布をかけて、ウイスキーと蜂蜜を入れたコーヒーを飲みながら、彼女/彼(=ロボ夫)は考える。と同時に、しかしこの時間は最高だな、とも思っている。

11. エウリュアレー(=ロボ夫)は洞穴から出てくるなりギユンと辺りを見渡した。ただ、ちょっと外の世界を見たいだけなのに、見るもの全部石になってしまうからほんとに悲しい。みんなが想像するのの何倍も悲しい。なんとか石にしないで覗き見る方法はないかしら、やっぱりサングラスみたいな何かが必要な、緑色のセロファンでなんとかかな。いったん穴に戻ってお姉さんに相談しよう。

.....

ああ、これでだいぶスッキリした。

ロボ夫の頭の中に渦巻いていたのは11の断章、のかけらだった。でもなんで11なのか、だいたいどっから出てきたんだろ。さてはあれかな、今日学校で気の遠くなるような演算を気の遠くなるような回数繰り返させられて、実際11回くらい気が遠くなったことと何か関係があるのかな、それとも、寝る前に見た怖い映画のせいか夜中に11回目も目を覚ましたことが影響してるのかしら。

そもそもロボ夫のロボ頭には、これまで誰かに書かれた物語や、誰かに書かれようとしている物語や、誰にも書かれないう物語まで、とにかくありとあらゆる物語が記憶されているわけで、おそらくこの11の断章もそのどれかの一部ではある、それはもう間違いなくそうなのだけれど、それと同時に、ロボ夫のロボ脳が抽出・分類・再構成したこれら11の断章は間違いなくロボ夫自身のものでもあった。ロボ夫はそう考えるとなにか誇らしいような気持ちになって、なんとなく、随分昔に93コ上の姉、ロボ美が言った言葉を思い出した。

「いつかロボ夫にもわかる時がくるよ。大人になるってそういうことなんだよ。」

なるほど、そういうことってこういうことか。  
あ、ロボ夫がブロンブロンないている。

おしまい

